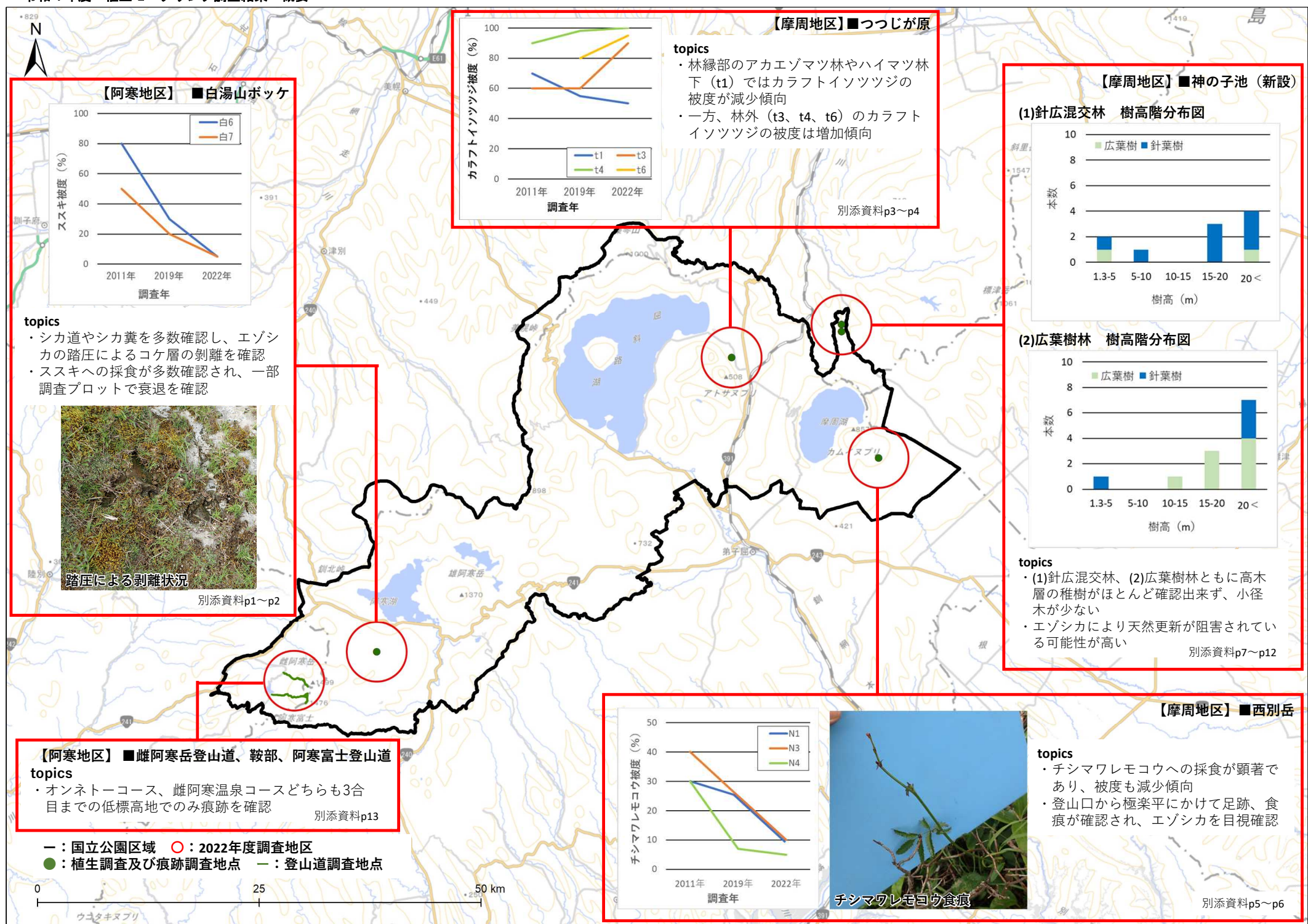




令和4年度 阿寒摩周国立公園エゾシカ対策協議会 現地研修会
議事概要

日時：令和4年12月6日（火）9：30-16：30

座学会場：川湯ふるさと館 情報交流室

現地研修場所：仁伏地区（根釧西部森林管理署 4297 林班）、和琴半島（和琴半島遊歩道）

午前：現地研修

講師：地方独立行政法人北海道立総合研究機構 林業試験場 道北支場 明石 信廣 支場長

- （1） 森林におけるエゾシカ影響の見かた-対策事業地
- （2） 林野庁で実施している捕獲対策及びモニタリングについて
- （3） 森林におけるエゾシカ影響の見かた-影響が出始めている森林

午後：情報共有の仕組み検討

講師：酪農学園大学 農食環境学群 環境共生学類 生物多様性保全研究室 立木 靖之 准教授

- （1） エゾシカ対策に関する情報共有
- （2） 今後の情報共有の仕組みに関する検討
- （3） 意見交換



現地研修：森林におけるエゾシカ影響の見かた（樹皮の食痕についての解説）



現地研修：森林におけるエゾシカ影響の見かた（エゾシカの影響の少ない森林についての解説）



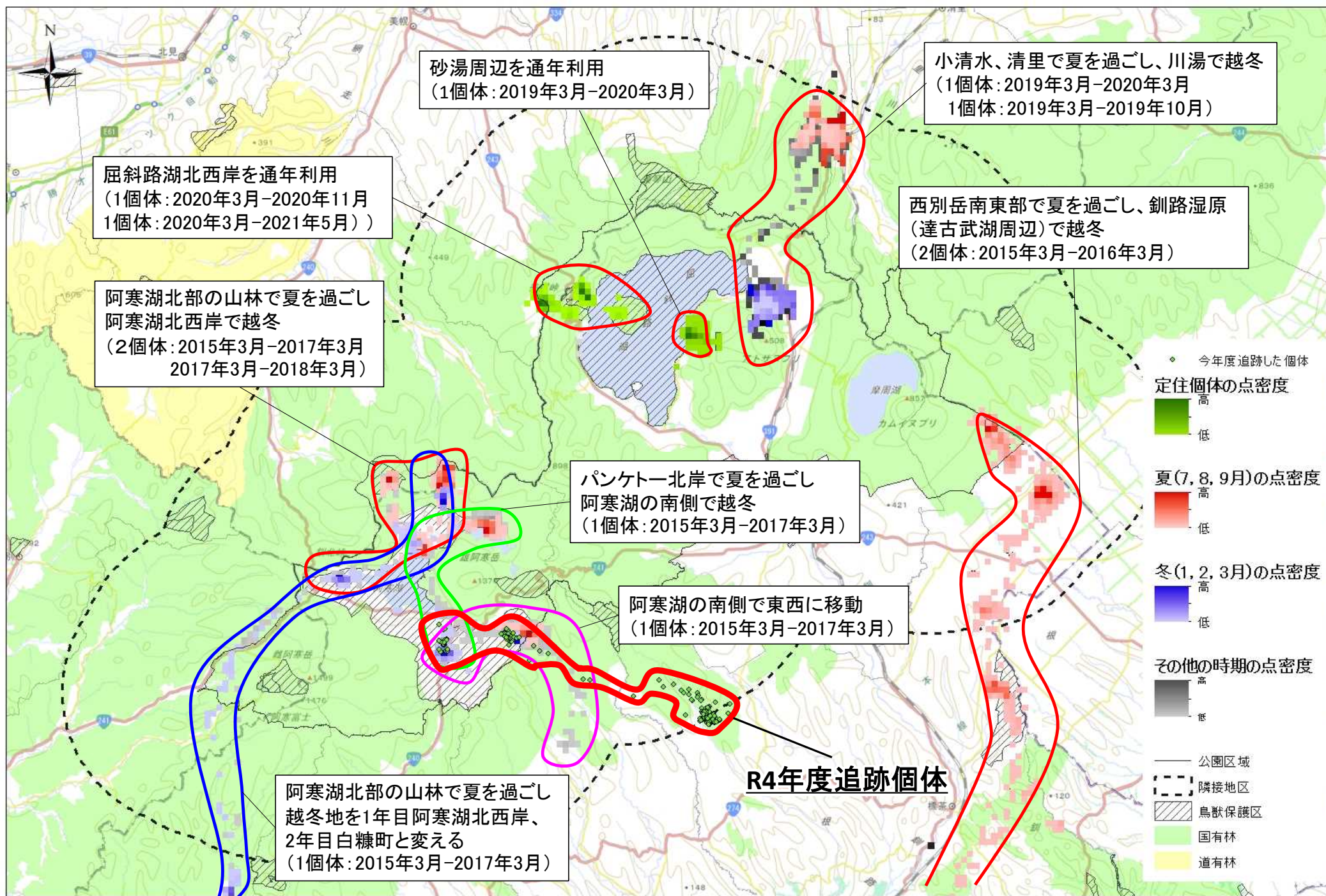
エゾシカ対策に関する情報共有：地図を囲んだ情報交換

＜エゾシカ対策に関する情報共有で挙げられた意見の概要＞

- ・昨年度捕獲事業にて、囲いわなの落とし扉の部品が凍結し、落とし扉が落ちないことによる捕獲失敗事例があった。
- ・これまではあまり狩猟に入ってほしくないという意向の農家が多い地域において、エゾシカが増えたことから、今年はエゾシカを捕獲して欲しいという要望が農家から寄せられた。
- ・ここ 5 年間で有害鳥獣捕獲での捕獲数が増加し続けている。
- ・狩猟者から今年はシカが多いという情報があった。
- ・今年は、樹皮はぎ被害が出始める時期が例年と比べて早い。

＜意見交換で挙げられた意見の概要＞

- ・ツールとしての使用感は、PDF マップより Google マイマップの方が良い。
- ・行政機関がクラウドサービスを使うにあたって、使用許可申請が必要であり、無料のクラウドサービスは申請が通らない可能性がある。
- ・業務で使用する場合には、背景地図の著作権を考慮する必要がある。
- ・無料に近い形で全ての意見に対応したものを提供することは難しい。今回紹介された手法についてもこれで決定ということではなく、まずはスタートして、使い勝手なども含めて試行錯誤しながら少しずつ完成形に近づけていければいい。
- ・机上で対策の計画を立てる場合と、現地に行って自分の位置を参照しながら情報を利用する場合で求められる仕組みは異なる。計画を立てる場合は PDF マップが活用可能なのではないか。
- ・今回は共有の手法について検討したが、それらの情報を使って実際にはいつ、どのような場面で、どのような対策ができるのかについても検討した方がいい。
- ・Google へのログインが必要な GoogleDrive を使う方法は、行政機関では使えないが、URL を共有する方法なら使える可能性がある。



10 5 0 10 km

出典:国土交通省国土数値情報ダウンロードサイト(<https://nlftp.mlit.go.jp/ksj/index.html>)より加工、国土地理院ウェブサイト(<https://fgd.gsi.go.jp/>)

平成26年度釧路湿原国立公園エゾシカ捕獲手法検討調査業務、平成26年度阿寒国立公園におけるエゾシカ対策調査業務、平成27年度阿寒国立公園におけるエゾシカ対策調査業務、平成28年度阿寒国立公園エゾシカ捕獲対策検討業務、平成30年度阿寒国立公園エゾシカ捕獲対策検討業務、令和元年度阿寒国立公園エゾシカ捕獲対策検討業務、令和2年度阿寒国立公園エゾシカ捕獲対策検討業務、令和3年度阿寒国立公園エゾシカ捕獲対策検討業務、令和3年度(緑越)阿寒国立公園エゾシカ捕獲対策検討及び行動追跡調査業務

非積雪期捕獲手法の検討

1. 背景

- ・阿寒摩周国立公園エゾシカ対策実施計画において、「針広混交林の天然更新を実現するための具体的な目標設定や、その目標の達成に向けた効果的な手法の検討、試行及び課題解決を行う。」とされている。
- ・令和2年度の阿寒摩周国立公園エゾシカ対策協議会において、非積雪期における捕獲が重要であるが、餌資源が豊富な時期であり給餌による誘引効果が薄く効率的な捕獲手法がないことが課題となっているとの意見が出され、協議会において非積雪期の捕獲手法検討を行っていくことが決定された。

2. 検討方法

非積雪期の捕獲検討にあたり、国内で公表されている捕獲マニュアルの収集を行い、手法別に長所と短所を整理した。(表1)

表1. 主な捕獲手法の長所と短所

手法名	適用条件	長所	短所
くくりワナ	・シカ道がある ・ワナを固定する立木がある	・運搬及び設置が容易 ・わな猟免許だけで実施可能 ・夜間捕獲が可能 ・ワナは安価	・捕獲頭数は1頭 ・技術と経験を要する ・頻繁な見回りが必須 ・錯誤捕獲の可能性 ・止め刺しの危険性 ・クマの誘引
箱ワナ(天井がある小型のワナ)	・設置場所の制約が少ない	・設置場所の制約が少ない ・生体捕獲が可能 ・機動性が高い ・省スペース	・捕獲頭数は1頭 ・幼獣捕獲が多い ・錯誤捕獲の可能性
小型囲いワナ	・周囲長 20m 以下 ・立木密度の低い環境	・一度に複数頭捕獲可能 ・生体捕獲が可能 ・コスト：低 ・機動性が高い ・省スペース	・捕獲頭数が少ない ・警戒心が高まり捕獲効率が落ちる
中型囲いワナ	・周囲長 20～50m ・立木密度の低い環境	・一度に複数頭捕獲可能 ・生体捕獲が可能 ・コスト：中 ・資材、形状次第で機動性の確保が可能	※規模を大きくすることでコストが高くなり、機動性も低下する
大型囲いワナ	・周囲長 50m 以上 ・立木のない開放地 ・多数のシカが生息する場所	・1度に多数の捕獲が可能 ・生体捕獲が可能 ・強度がある ・警戒心があまり高まらない	・コスト：高 ・移設が困難

本州での捕獲マニュアルは、【くくりわな】による捕獲を取り扱ったものが多いが、北海道において非積雪期に【くくりわな】による捕獲を行う場合には、ヒグマの誘引可能性などの課題がある。また、【箱ワナ】についてもヒグマの錯誤捕獲の可能性がある。

ここでは一度に複数頭の捕獲が可能である囲いワナについて更なる情報収集を行った。

表 2. 北海道内で非積雪期に囲いワナを用いて実施された捕獲事例

実施主体	実施場所	年度	実施期間	環境	誘引方法	規模	捕獲頭数
北海道	稚内市	R1	7-9 月	住宅街	配合飼料	中型	39
稚内市		R2	7-9 月				42
		R3	7-9 月				21
		R4	8-10 月				58
小清水町	小清水町	R4	10-12 月	草地	牧草	中型	9
北海道	津別町	R3	9-10 月	森林	牧草（ルーサンヘイ）	中型	4
		R4	9-10 月		牧草（ヘイキューブ）		8

次に、北海道における非積雪期に実施された囲いワナによる捕獲の事例を収集した（表 2）。

3. 非積雪期の囲いワナによる捕獲の課題

- ・周囲に餌資源が豊富な時期であるため、給餌による効果的な誘引方法
- ・ヒグマの誘引を避ける工夫（ワナ内のシカが傷つくとクマを誘引する可能性）
- ・ワナの壁材と地面の間の隙間を埋める工夫
- ・エゾシカの生息地を考慮した実施場所の選定（非積雪期はエゾシカが分散している）
- ・高気温時の捕獲において、追い込みや輸送時の高温による衰弱や死亡リスク

4. 令和 5 年度の事業

非積雪期の効率的な捕獲を目指し、手法毎の課題解決に向けた工夫や適地を検討する。また、検討結果については協議会構成員及びオブザーバーに情報を共有する。

別添資料

令和4年度植生モニタリング調査結果

1. 白湯山ポッケ

植生調査結果

表1 白湯山における2011年、2019年及び2022年の確認種及び被度（調査面積1㎡）（1）

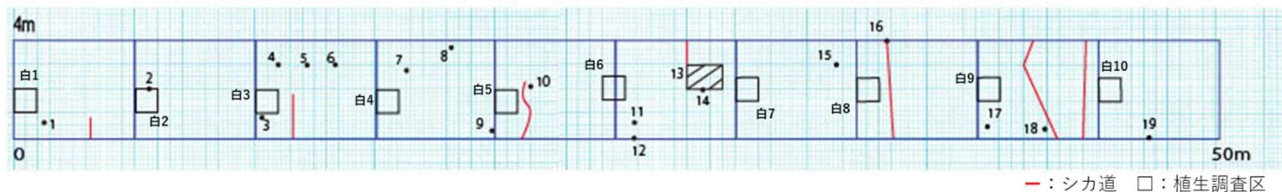
調査地点名	白1			白2			白3			白4			白5		
調査日	2011年 10月11日	2019年 9月21日	2022年 7月22日	2011年 10月11日	2019年 9月21日	2022年 7月22日	2011年 10月11日	2019年 9月21日	2022年 7月22日	2011年 10月11日	2019年 9月21日	2022年 7月22日	2011年 10月11日	2019年 9月21日	2022年 7月22日
出現種名/被度(%)															
テンツキ	50	50	20	50	50	50	60	60	75	50	40	40	60	60	15
メヒシバ		1	30	5	5	15	5	5	25	5	5	10		5	20
ススキ		+			1	1	1	5	2		8	3	3	10	5
ヌカキビ		+		1	1	1		+	+	1	+		5	1	
シロバナヤマジソ							5	5	5	2	2	3	2	5	20
ミズスギ								+	+						
エゾヌカボ														+	+
アカエゾマツ															
ゼンマイ														+	
ヒカゲノカズラsp.							2			1					
コケspp.	80	80	70	80	70	80	70	70	75	80	70	70	50	60	60

表2 白湯山における2011年、2019年及び2022年の確認種及び被度（調査面積1㎡）（2）

調査地点名	白6			白7			白8			白9			白10		
調査日	2011年 10月11日	2019年 9月21日	2022年 7月22日	2011年 10月11日	2019年 9月21日	2022年 7月22日	2011年 10月11日	2019年 9月21日	2022年 7月22日	2011年 10月11日	2019年 9月21日	2022年 7月22日	2011年 10月11日	2019年 9月21日	2022年 7月22日
出現種名/被度(%)															
ススキ	80	30	5	50	20	5	50	70	30	30	70	60	20	40	25
テンツキ							20	+	+	40	5	+	30	30	10
ヌカキビ							40	3	1	20	1	2	20	1	1
メヒシバ							2		3	3	3	1	3	3	5
シロバナヤマジソ								5	30	5	10	25	5	20	35
アカエゾマツ		5	1	5	30	70									
クマイザサ	90	80	70	90	80	95									
ミズスギ												+			+
ゼンマイ		+		5	3	3								+	
ノリウツギ	5		1												
ヒカゲノカズラsp.															
エゾヌカボ		+													
スミレsp.														+	
コケspp.	2	5	3	10	10	10	90	80	70	70	80	75	70	60	45

※本調査区は、2011年の設置当初からエゾシカによる影響を確認

痕跡調査結果



白湯山における痕跡確認位置図（シカ道総延長：約 19m）

表 3 白湯山における痕跡確認内容

No. 痕跡内容

- 1 足跡
- 2 足跡
- 3 足跡
- 4 足跡
- 5 足跡
- 6 足跡
- 7 足跡
- 8 旧シカ糞
- 9 旧シカ糞
- 10 足跡
- 11 旧シカ糞
- 12 ススキ食痕
- 13 寝跡
- 14 ススキ食痕
- 15 旧シカ糞
- 16 旧シカ糞
- 17 旧シカ糞
- 18 旧シカ糞
- 19 足跡、旧シカ糞

トピック

- ・ススキへの食痕が多数確認され、調査区白 6 及び白 7 では被度の減少が確認された。この二つの調査区は、带状区内にある小規模針葉樹林帯にあり、エゾシカの利用頻度が他の調査区に比べ高い可能性がある。
- ・白湯山全域でシカ道やシカ糞を多数確認し、エゾシカの踏圧によるコケ層の剥離が確認された。

考察

植生調査の結果から、2011 年に比べ植生景観としての大きな衰退は確認されなかった。しかし、痕跡調査より複数のシカの痕跡が確認され、エゾシカの踏圧による地表面の剥離が確認された。白湯山は噴気孔原植生であり、地表面が脆弱であるため、このまま影響が継続し地表面の剥離頻度が高くなると植生の回復が困難となり裸地化してしまう可能性がある。

2. つつじが原

植生調査結果

表4 つつじが原における2011年、2019年及び2022年の確認種及び被度（調査面積1㎡）

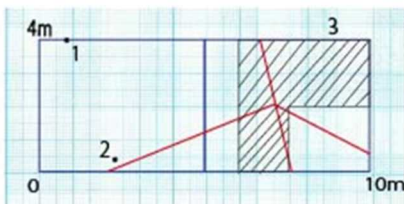
調査地点名	t1			t2			t3			t4			t6		
調査日	2011年 10月13日	2019年 9月12日	2022年 7月20日	2011年 10月13日	2019年 9月12日	2022年 7月20日	2011年 10月13日	2019年 9月12日	2022年 7月20日	2011年 10月13日	2019年 9月12日	2022年 7月20日	2011年 10月13日	2019年 9月12日	2022年 7月20日
出現種名/被度(%)															
カラフトイソツツジ	70	55	50	90	90	70	60	60	90	90	98	100	-	80	95
ヤマドリゼンマイ	30	60	80	3	3		10	25	30				-		
オオバスノキ	5	2	3										-		
ガンコウラン													-	35	20
ノリウツギ							5						-	5	5
ハイマツ(下枝)				50	50	80							-		
マンネンスギ								+	1				-		
ハナゴケspp.							70	60	3				-	3	
スギゴケsp.													-	+	

※t6は2019年に新設

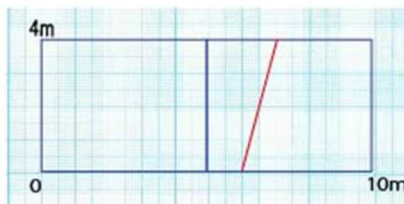
※本調査区は、2011年の設置当初からエゾシカによる影響を確認

痕跡調査結果

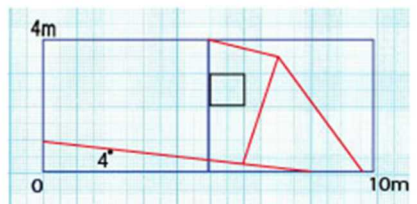
t1 アカエゾマツ林



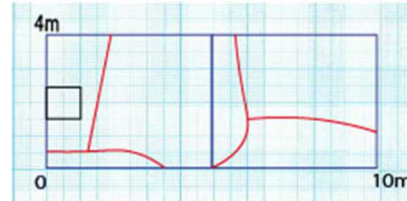
t2 ハイマツ林



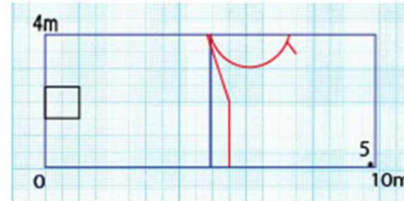
t3 カラフトイソツツジ群落



t4 カラフトイソツツジ群落



t6 カラフトイソツツジ群落



—：シカ道
□：植生調査区

つつじが原における痕跡確認位置図（シカ道総延長：約56.5m）

※t1とt2は帯状区外に植生調査区を設定

表5 つつじが原における痕跡確認内容

No. 痕跡内容

- 1 ヤマウルシ食痕
- 2 ヤマドリゼンマイ食痕
- 3 ヤマドリゼンマイ食痕
- 4 ミズナラ食痕
- 5 ミズナラ食痕

トピック

- ・アカエゾマツ林縁部の調査区 t1 においてはカラフトイソツツジの被度は減少傾向にあった。一方で、林外の調査区 t3、t4 及び t6 ではカラフトイソツツジの被度は増加傾向にあった。このことから、植生の被覆が多い林縁部を優先して利用している可能性がある。

考察

植生調査の結果から、2011 年に比べ植生景観としての衰退は確認されなかった。一方で痕跡調査の結果から、複数のシカ道が確認され、カラフトイソツツジのような低木は踏圧による影響を強く受けていることが示唆された。また、釧路湿原国立公園の事例⁽¹⁾から、カラフトイソツツジは夏期に比べ冬期に盛んに採食されることで、開花結実数が低下していることが報告されており、つつじが原に関しても冬期に採食を受けている可能性がある。

出典(1)：令和 2 年度釧路湿原生態系維持回復事業エゾシカによる植生への影響調査業務報告書、釧路自然環境事務所

3. 西別岳

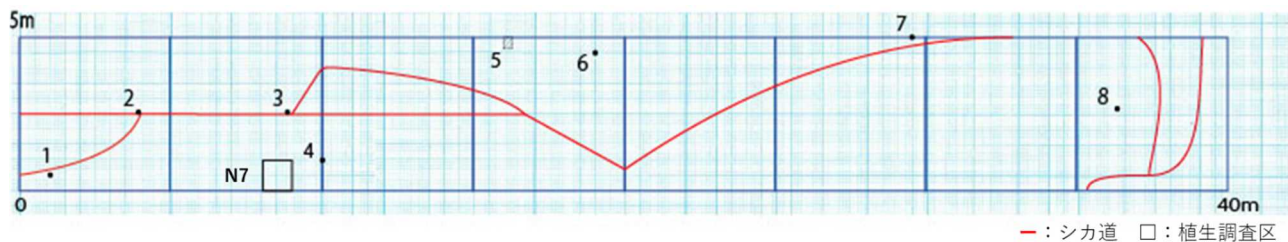
植生調査結果

表 6 西別岳における 2011 年、2019 年及び 2022 年の確認種及び被度（調査面積 1 m²）

調査地点名	N1			N2			N3			N4			N5			N6			N7			
	2011年 10月4日	2019年 9月10日	2022年 8月18日	2011年 10月4日	2019年 9月10日	2022年 8月18日	2011年 10月4日	2019年 9月10日	2022年 8月18日	2011年 10月4日	2019年 9月10日	2022年 8月18日	2011年 10月4日	2019年 9月10日	2022年 8月18日	2011年 10月4日	2019年 9月10日	2022年 8月18日	2011年 10月4日	2019年 9月10日	2022年 7月28日	
出現種名/被度(%)																						
エゾツツジ	10	5	2	5	8		1	2	1	3	+	+			1	2	5	1	2	10	+	+
ガンコウラン	80	60	80	80	98	95	80	80	60	80	90	65	70	90	70	60	90	85	60	60	60	85
クロマメノキ	10	10	30	40	60	50	30	35	50	40	35	40	20	45	50	20	25	60	20	35	40	
コガネギク		+	+	+	2	2		1	+	+	+	+			1	1		1	+	2	+	
コケモモ	20	15	10	10	5	3	2	3	5	10	2	2	20	2	3	5	2	2	2	2	1	2
シラネニンジン	+	3	2	+	2	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	1	+	1	+	+	+	+
スゲsp.	10	5	3	3	5	3	20	4	5	10	4	1	20	4	3	10	2	2	2	3	1	1
チシマゼキシヨウ	1	+	1	10	4	3	3	1	2	3	1	1	1	1	1	5	5	7		+	+	+
チシマワレモコウ	30	25	10	10	20	10	40	25	10	30	7	5	20	7	10	5	20	50	5	2	5	5
ツリガネニンジン		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
ノギラン				2	5	1			+			+						2	2	2	2	2
ミヤマヤナギ	3	2	5				3	1	3	1	+	+	30	+	15	5	2	2	2	+	1	1
ウシノケグサ	1		+	5	1		3	+	+	2	+	+	5	2		2	2	2	+	5	+	+
エゾムラサキツツジ	1	2	1	1	1	1	2	2	+	2	+		3	2		1	+	+				
エゾリンドウ				+	+	+		+	+	+					+			+		1	+	+
マイヅルソウ	+	+	+				+	+	1	+	1	2	+	+	+							
ミヤマヌカボ			+	1		+					+	+	3		+	3		+	+		+	+
ツマトリソウ											+	+		+	+		+	+				
イネ科sp.				2	2	+							5	+	+	3	+	+				+
イワノガリヤス	10	+								1		+				+		+				
タカネナナカマド							+												+			+
ミネズオウ											+	3							10	3	10	
チシマセンブリ																		+				
クマイザサ	10	12	15																			
マンネンズギ																	2					
ミヤマキンバイ																			10	8	+	+
ヒメイチヂ									+													1
ダケカンバ																			2			+
マルバシモツケ																						
カラフトイソツツジ																						
スライカズラsp.	+	1		+																		
ヤナギタンポポ															+			+	+			
フウロソウsp.								+														
コケsp.	1	30	60	2	3	5		15	15	1	5	30		2	30		5	10	20	10	10	55

※本調査区は、2011 年の設置当初からエゾシカの影響を確認

痕跡調査結果



西別岳における痕跡確認位置図（シカ道総延長：約 56m）

※N1～N6 は帯状区外に植生調査区を設定

表 7 西別岳における痕跡確認内容

No. 痕跡内容

- 1 ミヤマヤナギ食痕
- 2 カバノキ食痕
- 3 ムジナスゲ食痕
コガネギク食痕
- 4 チシマワレモコウ食痕
- 5 チシマワレモコウ食痕
- 6 チシマワレモコウ食痕
- 7 ミヤマヤナギ食痕
- 8 チシマワレモコウ食痕

トピック

- ・チシマワレモコウへの採食が顕著であり、調査区 N1、N3 及び N4 において被度は減少傾向にあった。
- ・コケモモの被度が調査区 N1、N2、N4、N5 及び N6 で減少傾向にあった。
- ・登山口から極楽平にかけて足跡、食痕が確認され、山頂付近の斜面で採食中のエゾシカを目視確認。

考察

植生調査の結果、2011 年に比べ植生景観としての衰退は確認されなかった。しかし、痕跡調査の結果、複数のシカ道が確認されたことに加えて、山頂付近でのエゾシカの目撃や、登山口から極楽平にかけて登山道沿いでのエゾシカの足跡等が確認されていることから、西別岳を広く利用していることが伺える。そのため、今後エゾシカの採食や踏圧を受け続けることで植生が衰退してしまう可能性がある。

4. 神の子池

今年度より植生調査区及び毎木調査区を新設した。

植生調査結果

(1) 針広混交林

表 8 神の子池針広混交林における確認種及び被度（調査面積 1 m²）

調査地点名	混1	混2	混3	混4	混5
出現種名	被度(%)	被度(%)	被度(%)	被度(%)	被度(%)
エゾミヤコザサ	45	30	50	5	35
トドマツ実生	+	+	+	+	+
マイヅルソウ	1	+	1	2	+
コミヤマカタバミ	+	5	5	1	1
ゴゼンタチバナ	1	5	2	+	1
アオスゲ	85	90	3	3	50
ツマトリソウ	+	3	+		
セリ科sp.		+	+	+	
シラネワラビ			10	50	40
ウサギシダ	2	1			
スゲsp. A		10	1		
エゾイチゴ		3			5
ミヤマタニタデ		+		1	
ヒメイチゲ			+		+
ミヤマワラビ				5	1
ヨブスマソウ				2	3
ミヤママタタビ	3				
トネリコsp. 実生		+			
ヤマドリゼンマイ			10		
ミミコウモリ			3		
マンネンスギ			5		
アザミsp.			2		
サラシナショウマ				30	
スミレsp.					+
スゲsp. B					+

調査日：令和4年7月19日

(2) 広葉樹林

表 9 神の子池広葉樹林における確認種及び被度（調査面積 1 m²）

調査地点名	広1	広2	広3	広4	広5
出現種名	被度 (%)	被度 (%)	被度 (%)	被度 (%)	被度 (%)
スゲ sp. B	80	80	90	85	70
コンロンソウ	+	5	2	+	+
ハルカラマツ	5	3	5		2
ムカゴイラクサ	5	5	3		5
メシダ sp.		70	50	3	5
キツリフネ	1	+			+
レンブクソウ	+			+	+
アオスゲ	5			50	5
クルマバソウ		1	+		1
トリカブト sp.	+				+
イタヤカエデ実生		1			+
タモノキ実生			+		+
サラシナショウマ				20	10
オシダ				5	5
ヨブスマソウ	3				
クサソテツ	3				
ハルニレ実生	+				
ウマノミツバ	+				
ハナワラビ sp.	+				
マムシグサ		+			
ヒメゴヨウイチゴ		+			
オシダ sp.			3		
ヤマドリゼンマイ				30	
ホザキナナカマド				2	
セントウソウ				+	
マイヅルソウ				+	
シラネニンジン				3	
ミヤママタタビ				+	
ギンリョウソウ					+
ミズ sp.					+
ツマトリソウ					+
ハリギリ実生					+

調査日：令和 4 年 7 月 19 日

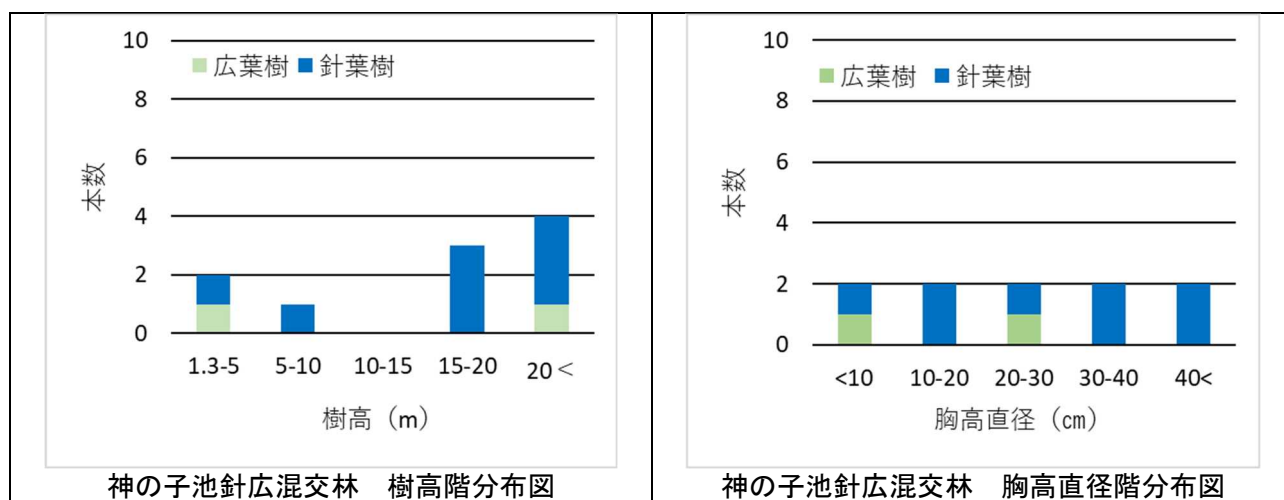
毎木調査結果

(1) 針広混交林：毎木調査の結果、調査面積（200 m²、5m×40m）において、針葉樹はトドマツ、エゾマツ計 8 本、広葉樹はケヤマハンノキ、ダケカンバ計 2 本の生育を確認した。

ケヤマハンノキに一部古い角擦り跡を確認したが、その他の樹木へのエゾシカによる痕跡は確認されなかった。

稚樹調査の結果、ミヤママタタビ、ホザキナナカマド、コヨウラクツツジ、トガスグリ、エゾイチゴ、イタヤカエデの計 23 本を確認した。この中で高木になる種はイタヤカエデ（1 本）のみである。

樹高階分布図と胸高直径階分布図を下記に示す。健全な森林であれば、高木に比べ低木が、大径木に比べ小径木がそれぞれ多くなる反比例の分布になる傾向があるが、当該調査区では小径木が少なく、ある程度成長した個体が大半を占めている。

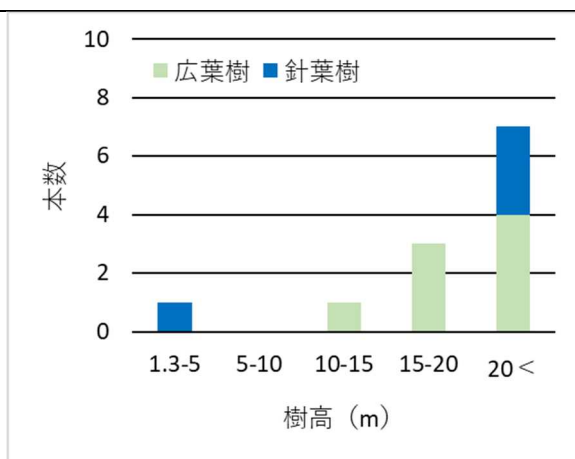


(2) 広葉樹林：毎木調査の結果、調査面積（200 m²、5m×40m）において、針葉樹はトドマツ計 4 本、広葉樹はヤチダモ、ケヤマハンノキ、オヒョウニレ、イタヤカエデ、ゴトウヅル計 10 本の生育を確認した。

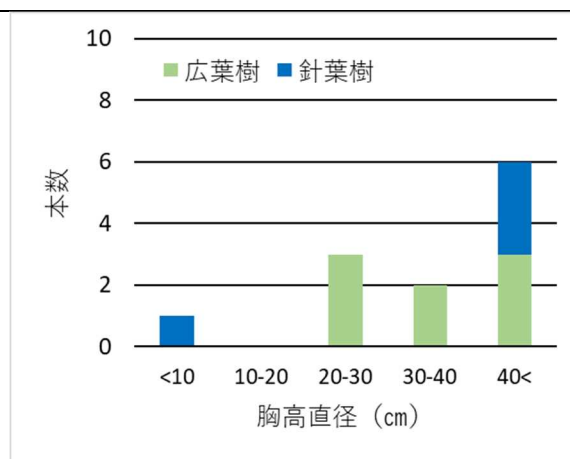
樹皮剥ぎ等の樹木へのエゾシカによる痕跡は確認されなかった。

稚樹調査の結果、ミヤマタタビ、ホザキナナカマド、エゾスグリ、ヤマブドウの計 11 本を確認した。稚樹調査では高木になる種は確認されなかった。

樹高階分布図と胸高直径階分布図を下記に示す。(1) 針広混交林と同様に当該調査区では小径木が少なく、ある程度成長した個体が大半を占めている。



神の子池広葉樹林 樹高階分布図
※ゴトウヅル（ツル性）は省いて整理



神の子池広葉樹林 胸高直径階分布図
※ゴトウヅル（ツル性）は省いて整理

(1) 針広混交林

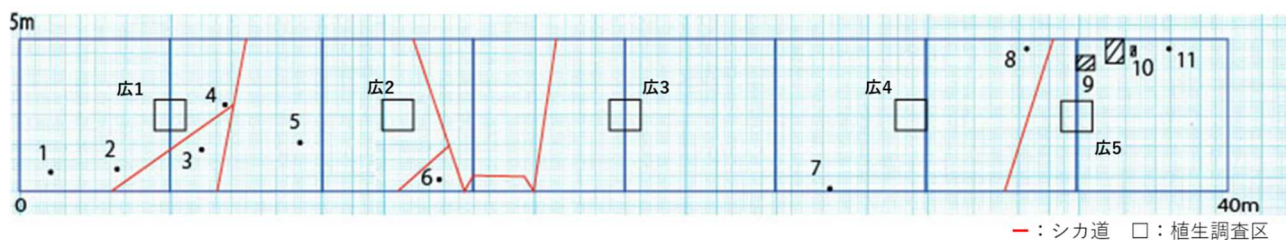


表 10 神の子池針広混交林における痕跡確認内容

No. 痕跡内容

- 1 ヤマドリゼンマイ食痕
- 2 スゲsp.食痕
- 3 アザミsp.食痕
- 4 ササ食痕
- 5 ササ食痕
- 6 トリカブトsp.食痕
- 7 シカ糞
- 8 寝跡
- 9 ヤマドリゼンマイ食痕
- 10 寝跡
- 11 シカ糞
- 12 ヤマドリゼンマイ食痕
- 13 シカ糞

(2) 広葉樹林



神の子池広葉樹林における痕跡確認位置図（シカ道総延長：約 30m）

表 11 神の子池広葉樹林における痕跡確認内容

No.	痕跡内容
1	イラクサ食痕
2	キツリフネ食痕
3	オクヤマワラビ食痕
4	ヤマブドウ食痕
5	キツリフネ、イラクサ食痕
6	バイケイソウ食痕
7	スゲsp.食痕
8	ヤマドリゼンマイ食痕
9	ヤマドリゼンマイ食痕
10	寝跡
11	ヤマドリゼンマイ食痕

考察

針広混交林において、下層植生への食痕が確認され、エゾシカによる利用が確認された。また、毎木調査の結果、ケヤマハンノキへの古い角擦り以外の直接的な痕跡は確認されなかったが、小径木や高木層の稚樹の生育数はわずかであった。

また、広葉樹林においても、下層植生への食痕やシカ道が確認され、エゾシカによる利用が確認されたほか、毎木調査の結果、小径木はわずかで高木層の稚樹の生育は確認されなかった。

これらのことから、針広混交林及び広葉樹林ともに、過去複数年にわたってエゾシカの採食圧を受け続けたことで、天然更新が阻害されている可能性がある。

5. 登山道調査結果



2019 年度、2021 年度及び 2022 年度登山道調査痕跡確認位置図

今年度はオンネトーコース及び雌阿寒温泉コースどちらも登山口から 3 合目までの低標高地でのみエゾシカの痕跡が確認された。3 合目より高標高地においてはエゾシカの痕跡は確認されなかった。

痕跡の内容としては、足跡、ミヤマハンノキの食痕、及びナナカマドの樹皮剥ぎであった。



ミヤマハンノキの食痕



ナナカマドの樹皮剥ぎ

考察

2019 年度（秋期）には、高標高地において多数のエゾシカの痕跡が確認されたが、2022 年度（夏期）には痕跡が確認されなかった。これは調査時期が異なったことが要因の可能性もある。（季節を考慮した調査時期を検討）

GPS首輪の装着を目的とした捕獲作業場所

資料1-①-3 参考

